

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第63号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)8月16日 水曜日

2017年(平成29年)8月16日 水曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営
コンサルタント、趣味は、縄
文文化研究、この2月に株
式上場プロフェッショナルを
養成し、IPOの経営者教育
も行うスクール『IPOマス
タースクール』を開校、校長
就任



【ホヤ料理を楽しむ会 8/5】

国内消費を増やすため「ホヤファン」大増殖必須

あらためて「ホヤ」につ いての基礎知識から

筆者は、ホヤの水揚げが
国内で最も多い石巻漁港に
近い宮城県の出身なので、
ホヤは小さいころから身近
な水産物であったため、ホ
ヤについての思い入れが特
に強く、日本人ならだれで
もがホヤを知っているとい



ホヤファンの面々

ままで思い込んでいた。
そのため、当新聞ではこ
れまでホヤのことを当然皆
が知っているという前提に
立ち記事にしてきたが、よ
くよく考えてみるとホヤを
よく知っている日本人はこ
く少数であるという事実
気がついた。
そこで、ホヤを知らない
人に対して、あらためてホ

ヤについての基礎知識を提
供するところからこの記事
を開始しようと思う。
*
まず、ホヤは、ホヤ貝と
かわれることもあるが貝
ではなく、尾索動物に分類
され、人間などの脊椎動物
に近いグループに属する。
日本、韓国、フランスやチ
リなどで食べられていて、

非常に海の香りが強く、ミ
ネラル分が豊富な水産物で
ある。
日本では主にマボヤ科の
マボヤとアカボヤが食用に
供されている。
古くからホヤの食用が広
く行われ、多く流通するの
は主に東北地方北部沿岸の
石巻漁港がある宮城県では
酒の肴として一般的である。
また北海道でも一般的に食
用の流通がある。多いのは
マボヤであり、アカボヤの
食用流通は北海道などであ
るが少ない。
東京圏で食用が広まり多
く流通するようになったの
は近年である。
中部地方以西・西日本各
地では、現在においてもな
おごく少ない。
特にワタと呼ばれる肝臓
や腸には独特の匂いがあり、
これを好む者はワタごと調
理し、苦手な者はワタを除
去すると独特の匂いがかな
り抑えられる。ホヤの中の
水(ホヤ水)にもホヤ特有
の香りがあり、刺身を作る
際はホヤ水を使って実を洗
ったり、独特の香りを好む
ものは、醤油の代わりにホ
ヤ水にワタを溶いたものを
つけて食べる。
新鮮なものは臭わないが、
鮮度落ちが早く、時間が経
つにつれて金属臭もしくは
ガソリン臭と形容されるよ
うな独特の臭いを強く発す
るようになる。冷たい海水
につけておくと鮮度が落ち
にくい。

首都圏で出回るものは鮮
度が悪く全体に独特の匂い
が強まっており、好き嫌い
が分かれる要因のひとつと
なっている。(Wikipedia
より抜粋、一部筆者編集)
ホヤが大量廃棄された
このようなホヤであるが、
実は、昨年、水揚げされて
在庫されていたものを大量
廃棄するということがあつ
た。
そして、昨年続き、今
年も大量廃棄がうわさされ
ている。それは苦渋の決断
となるであろうが、どうに
も避けられない見通しのよ
うである。
せっかく、大震災以降、
壊滅状態に陥ったホヤ養殖
事業を何とか四年もかけて
復興するまでにこぎつけた
のではあるが、まことに残
念ながら、いままぐ大量廃
棄を防ぐ有効な手立ては見
つかっていない。
生産者としては泣くに泣
けない状況であろう。
こうなってしまう原因
については、当新聞で何度
も取り上げてきたように、
大震災以降、輸出一辺倒だ
ったホヤ出荷体制が、福島
第一原発による風評被害で、
生産量の七割から八割を占
めていた韓国への輸出が完
全に止まったせいである。
いくら風評被害であり、
品質検査上問題はないと訴
えても、聞き入れてくれず、
輸入再開とはならない。
他方、国内消費は、大震
災以前から長期的に落ち込



ホヤ飯



ホヤチーズ焼き



焼きホヤ



ホヤの酢の物と一夜漬け

んでおり、大震災後も回復の兆しは見えない。そうした国内消費の長期落ち込みをカバーすることを目指して輸出に最後の望みをかけ込んできたが、その策も出口を塞がれた形となつてしまったわけである。その結果としての大量廃棄である。

こうして、ホヤ養殖事業は、大震災以降、いやそれ以前から現在まで、実に何重もの被害に会つてきたともいえる。

想像以上に「ホヤ嫌い」が多い

前述のように筆者は、この他ホヤに思い入れが強い。このホヤが出荷先を見つけれずに廃棄されるというニュースを耳にしたときは、非常に驚き、残念でしかたなかった。

何とか解決の手立てや糸口はないものかと、何度も何度も考えた。

まず輸出については、残念ながら日本側の努力の外にあり、これをいくら叫んでも相手国の判断にゆだねるしかない。

国内で努力できるのは、国内消費増大策であり、打開策としてはこれしかないと考えた。

ところが、いろいろ話を聞いてみると、東京圏には「ホヤファン」は少なく、逆に「ホヤ嫌い」が結構多いことが分かってきた。

しかも、希少価値の「ホヤファン」の出身地を聞くと、ほとんどが東北の太平洋沿岸部出身である。

その他の貴重なホヤファンの主なものは、日本酒のありととしてのホヤ好きであり、かなり人数は限定される。「ホヤ嫌い」は、過去にあまり新鮮でないホヤを食べたケースもあるし、また、好きな人にはたまらない強烈な潮の香りそのものが最初から好きになれないという人もいる。



ホヤの刺身と他の海鮮

「ホヤ料理を楽しむ会」企画までの経緯

この「ホヤ嫌い」を「ホヤファン」に転換するしか、国内消費を増やす手立てはないが、ではどうするか。

潮の香りが好きになれないというのは好みの問題なので、介入余地は少ないが、新鮮でないホヤを食べた経験から「ホヤ嫌い」になつた人には、もう一度新鮮なホヤ料理を提供することで



ホヤ干物

「ホヤファン」になつてももらえる可能性がある。

そこで、東京圏で、ホヤを取り上げたイベントや海鮮居酒屋を探してみたが、遠慮がちにホヤ料理を提供するところしか見当たらない。

ホヤ専門店もなし、ホヤ料理メニューがざらりと揃っている海鮮居酒屋もない。

とすれば、筆者自ら新鮮なホヤを厳選して調達して、ホヤ料理を作り、「ホヤ嫌い」に食べてもらい、本当



東北地酒

のホヤのおいしさを分かつてもらうしかないと思つた。

そして、ホヤ料理を提供する会場も手配しなければならぬ。ホヤ料理も決めなければならぬ。ホヤの調達先も探さなければならぬ。やらなければならぬことはたくさんあった。

しかも、失敗したら、さらに「ホヤ嫌い」が増殖する最悪の事態も引き起こしかねない。責任重大である。

念願の「ホヤ料理を楽しむ会」開催

会場探しであるが、いつも三陸酒海会場の会場となつている渋谷の焚火家のオーナーに恐る恐る聞いてみたところ、協力を申し出てくれ、いつもの焚火家を使って、料理や酒も三陸酒海会の枠を活用してはどうかと逆提案いただいた。

これで、会場も、料理人も、PR活動も、従来の三陸酒海会場の枠組みを活用できることとなった。



田森ミニミニライブ

あとは、素材調達とホヤ料理の決定である。

素材調達先は、幸い知人ルートで確保できた。

ホヤ料理は、定番の酢の物、塩辛、干物、焼きホヤ、ホヤ飯というオーソドックスな内容を中心に、知人のおすすめのチーズ焼きを加えることとした。

焼きホヤとホヤ飯は筆者も食べたことがないので、事前に料理にトライすることにした。

ホヤ料理は大好評

みご飯であった。

お店側と下打ち合わせも、素材供給先とも、開催時間にギリギリ間に合うような出荷で、新鮮なホヤ供給もお願いした。当日の挨拶も考えた。

ところが、どうしたことか、開催時間を一時間間違つて大遅刻をしてしまった。平謝りに謝り勘弁してもらう事態となった。

参加者は、当日参加を決めた人も含めて二十四名という想定を超えた参加者数だった。

料理もおいしく食べてもらったし、感想もすこぶる良かった。

田森君のミニミニライブ付きで、大遅刻を除き、大成功であった。

三陸の現地で「ホヤ食べれますか」は止めよう!

仙台などの海鮮居酒屋など、ホヤを提供するお店で、



恒例となった二次会

店員がお客に「ホヤ食べれますか」と聞くとという話を耳にしたことがある。

お客に「ホヤ嫌い」が多いので、ホヤを提供するのをためらうことによるものである。

しかし、この遠慮がちなのは止めた方がよいと思う。何だかゲテモノか何かを提供するようで、お客の側がホヤを知っているならともかく、この言葉で食べ

るの止めようということになりはしないかと懸念する。「ホヤ嫌い」ならぬ「ホヤの食べず嫌い」になってしまう。

もつと堂々と、「ホヤという珍味がありますが、ぜひ食べてみてください」と積極的に勧めて欲しいものだ。

渋谷での「ホヤ料理を楽しむ会」成功を踏まえて自信をもってそう思えるのだ。

『地方創生』を東北水産業復興に活かすための考え方 (東京一極集中を逆利用する)

今日七日、筆者が会員となつているインデペンデントクラブという株式市場に関連する会合に参加した際に、非常に興味深く聞いた経済に関する講演内容の一部を紹介したい。

その話とは、元みずほ銀行常務から、地方の創業支援に力を入れている第一勧業信用組合の理事長に転出した新田信行氏の地方創生と創業支援についての講演だった。

その話によれば、現在は「人・モノ・金」が東京に一極集中しており、真に地方創生を目指すならば、まずは、そのうちの「金」を地方に引き戻すことが必要だといふのである。

実現するのか？
地方の産物を東京に持ってきて販売し、その代価としての「金」を地方に持ち帰り、地方でその「金」を回して活性化を図り、文字通り「地方の創生」を図るというのである。

しかし、これを本気でやるとなると、東京サイドからみると、東京が儲からない構造であることが初めから分かっている。本気ではだれもやらない。

しかし、前述の第一勧業信用組合がこれをやると公に宣言したら、あちこちの地方の金融機関や地方自治体から、いっしょにやりたいという申し込みが短期間で殺到しており、さらに勢いを増しているということであった。

そして、儲からないと思われた構造ではあるが、小規模のアナログビジネスの「川下」産業育成に注力していけば、この厳しい金融の時代でも、何とか儲かりそうだというのである。

ここで話は大きく変わるが、この考え方を、東北水産業に応用してみると、東北の水産物を、ブランド化して、また付加価値をつけて価格を上げるなどして東京圏で売りさばき、その代価を地方に持ち帰るということになる。

*
たしかに、現在、地方は経済的に疲弊し、働き手の「人」は東京圏に吸収され、

「モノ」も同様で、その結果としての「金」も同様に東京に一極集中することになっている。

こうした構造のなかで、東北水産業の復興を実現するには、東北の水産物という「モノ」を起点に、上記の考え方を推進するしか方法は無いと思える。

東北内で、産地直送で消費するにしても限界がある。消費者数も、購入する金額も限られている。

ここでも東京に頼らなければならぬことに情けない思いを抱かれる方々もおられるであろう。

しかし、現実問題として、経済活動を行っている以上、東北内で「人・モノ・金」を回そうにも、絶対額が不足しているのである。

ここはぐっとこらえて、地方創生の波に乗ればいいのではないかと考えるのである。

*
こうした考え方は、当新聞が最初から目指していた考え方にも通じる。いわく、三陸水産業復興は、三陸現地で行う生産の復興と、その生産物を大都市圏で消費する復興と、二つに分けて推進するという考え方である。

たまたま、前日の講演を聞いて、当新聞が以前に打ち出した方向が間違っていないかたつと意を強くした次第である。

ぜひ、東北水産関係者の方々に耳を傾けて欲しいと思うのである。



東北復興の図式



【完成品】

第36回 水産業再興のための料理レシピ紹介 《イワシのフライ》

今、宮城産のイワシがまるまる太って店頭の色艶よく並んでいます。お腹を捌くと白い脂が入っていて、食べ頃ですよ。(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピー

【作り方】

- ① イワシは、頭とハラワタをとり、ウロコを綺麗に洗い流します。
- ② イワシは中骨に沿って、親指で身を剥がしていきます(手開き)。中骨をとったら、腹の部分が外側(黒)になりますので包丁で削ぎ落とします。捌いたイワシに軽く、塩・コショウで下味を付けます。
- ③ イワシに小麦粉をまぶし、溶き卵をくぐらせ、パン粉を順にまぶします。
- ④ イワシは170度でキツネ色になるようにサクッと揚げます。



写真でお伝えする

東北の風景 (夏の祭り)

写真撮影: 尾崎匠



観光とは外向きのことだけではない

仙台のイメージとは

前は仙台市の観光について、普段あまり比較されることのない前橋市と金沢市との比較で考えてみた。今回も引き続き、この両市との比較で考えてみた。

まず、仙台市の観光について考える材料としては、「平成27年度仙台市観光客動態調査報告書」が参考になる。インターネットと仙台市内での聞き取りで仙台市のイメージや観光資源の認知状況、来訪者の動向などを調査したものが、これを見ると、仙台が外からどのように見えているのかがよく分かる。

まず、仙台の「情緒イメージ」として多く挙げられているのが、「歴史のある」(52・6%)、「伝統がある」(38・0%)、「文化的な」(25・6%)、「落ち着いた」(20・8%)などである。これらは同じ政令指定都市と比べても仙台が優位なイメージである。例えば、「歴史のある」は札幌20・0%、名古屋25・8%、福岡21・3%、「伝統がある」は札幌15・6%、名古屋19・1%、福岡18・0%、「文化的な」は札幌17・6%、名古屋13・2%、福岡13・4%であるので、仙台はこれらの都市よりもかなり「歴史のある」、「伝統がある」、「文化的な」都市と見られているのである。

執筆者紹介

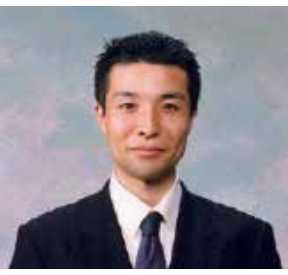
大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



「歴史のある」、「伝統がある」、「文化的な」都市と見られているのである。せつかく他の政令指定都市よりもこのようなイメージで仙台を捉えてもらっているにも関わらず、仙台はその強みを活かして切れていないように見える。「歴史のある」、「伝統がある」、「文化的な」仙台に行きたいと思った人が実際に仙台に来たとして、仙台のどこに行けば、これらを体感できるのかと考えると、甚だ心許ない気がする。

ちなみに、金沢は「歴史のある」が69・8%、「伝統がある」が64・8%、「文化的な」が45・6%、いずれも仙台のポイントを上

回っており、金沢はこうした情緒イメージが仙台よりも強いことが分かる。金沢の場合、金沢城&兼六園、茶屋街といった観光資源があり、足を運べば歴史や伝統を体感できる。また、金沢には「金沢なんでも体験プログラム」という、加賀友禅、金箔工芸、九谷焼、加賀蒔絵といった金沢の伝統工芸や伝統芸能などを気軽に体験できるプログラムが用意されており、まさに金沢の文化を体感できる体制が整っている。

このように金沢は、仙台以上に「歴史のある」、「伝統がある」、「文化的な」と評価されたイメージを、実際に体験できるハードソフトがあるわけである。そのことによってさらにこれらのイメージが強化されるという好循環が生まれているのではないだろうか。仙台が金沢に学ぶべき点はまさにここにあると思われる。

海から山までつながっている仙台

ちなみに、同報告書では「観光資源イメージ」についても調べている。それによれば、仙台の観光資源イメージとして、「美味しい食べ物・飲み物がある」が53・8%、「美しい自然や景勝地に恵まれている」が43・0%、「伝統的文化がある」が28・5%と高い。

「美味しい食べ物・飲み物がある」は札幌(71・0%)、福岡(61・5%)よりは低い

が金沢(47・6%)や名古屋(47・8%)よりは高い。これは恐らく、牛たんや海産物が牽引しているものと思われるが、こうした明確なイメージを持つてもらえるアイテムがあるのは強みであることが分かる。

「美しい自然や景勝地に恵まれている」も、金沢(49・2%)や札幌(46・8%)よりは低い。名古屋(7・8%)や福岡(12・4%)よりは圧倒的に高い。これは「杜の都」のイメージや、実際に自然が多く残されていることによるものと思われるが、このことが体感できるスポットが青葉通りや定禅寺通りだけというのではやはり不十分である。あまり普段意識されていないことだが、仙台は太平洋から奥羽山脈までを含む多様な地域である。太平洋沿岸から山岳地帯までが全てある。自然の様々な姿を見ることができ、貴重な地域である。

これは大きな強みであると思うのだが、このことを前面に出した観光案内などは今のところないように思う。海も平地も山も、全部の自然を体験できるパッケージができるというのではないだろうか。

「伝統的文化がある」は金沢(55・3%)には比べべくもないが、札幌(11・1%)、福岡(13・6%)、名古屋(19・1%)を上回っている。先に紹介した「金沢なんでも体験プログラム」のようなソフトの充

実が望まれる。観光に関しては、どう伝えるかも大変重要である。せつかくいい観光資源を持つていても、その存在やそのよさが伝わらなければ観光にとっては意味がない。

その点で、前橋に行った時に手に取った観光パンフレットが実に秀逸だった。手書き風の文字で「kurun」と書かれ、そばに「まえばしくるん」と小さく書かれているが何のことがよく分からない。表紙は饅頭か何か、あまり見たことのない食べ物らしきものを目のところに持ってきている女性の写真で、下の方には「これまた手書き風の文字で「Take Teal」と書かれているが、表紙だけ見た限りでは、これが何の冊子なのか分かる人はそういないのではないかと思われる。

前橋に学ぶ伝える工夫

観光に関しては、どう伝えるかも大変重要である。せつかくいい観光資源を持つていても、その存在やそのよさが伝わらなければ観光にとっては意味がない。

「まえばしくるん」と小さく書かれているが何のことがよく分からない。表紙は饅頭か何か、あまり見たことのない食べ物らしきものを目のところに持ってきている女性の写真で、下の方には「これまた手書き風の文字で「Take Teal」と書かれているが、表紙だけ見た限りでは、これが何の冊子なのか分かる人はそういないのではないかと思われる。

であることが説明され、「前橋市観光パンフレット」という記載を見てようやくこれが前橋市につくった観光パンフレットであることが分かるという寸法である。

通常、パンフレットというのは、その地域の観光資源についての情報をこれでもかというくらいに詰め込んでいて、網羅性はあるもののインパクトに欠ける面がどうしても残る。その結果、読み手の印象に残らず、実際に足も運ばれないというところになってしまう恐れがあるわけである。

この「kurun」はその点を見事にクリアしている。他の地域にはない、前橋ならではの観光資源だけをピックアップし、その魅力をインパクトのあるタイトル、デザイン、写真でこれでもかというくらいに強調しており、それらを読み手に深く印象付けられる構成となっている。

観光パンフレットというのは、その地域の「名刺」とでも言うべきものである。「私はこういう者です」ということを初対面の相手に伝える役割を持つているものである。ビジネスで初対面の相手にいかに自分のことを覚えてもらうかが大事であるのと同様に、その地域のことを分かってもらい、実際に足を運んでもらうことが観光パンフレットのミッションであるとするならば、その中身については、名刺が様々な工夫されている

のと同様にもっと工夫されてしかるべきであると思う。なお、「kurun」はウェブ上でも閲覧できるのでぜひ一度見てみていただきたい。(http://igo.info/kurun)

一方の金沢については、観光についての戦略やプランが実に充実している。観光を都市運営の柱にしようという強い意志と意欲が感じられる。金沢市のサイトを見てみると、「金沢魅力発信行動計画」(2012年2月)、「世界の『交流拠点都市金沢』をめざして」(2013年3月)、「金沢市国際交流戦略プラン」(2015年3月)、「金沢市観光戦略プラン」(2016年3月)、「世界の交流拠点都市金沢重点戦略計画」(2017年2月)など、観光や国際交流を強く意識して、そのために金沢として何を重視し、何を実践していくかを折に触れて明確にしているその姿勢がよく表れている。

これらの文書を見て感じるのが、金沢が目指す都市像が、観光政策というフィーターを通して明確になっているという事実である。自分たちの住む都市がどのようなもので、これから何を指すのか、ということとは、多くの場合、意外に明確になっていないし、そこに住む人たちの間の共通理解にもなっていない。金

金沢に学ぶ目指す都市像の明確化

一方の金沢については、観光についての戦略やプランが実に充実している。観光を都市運営の柱にしようという強い意志と意欲が感じられる。金沢市のサイトを見てみると、「金沢魅力発信行動計画」(2012年2月)、「世界の『交流拠点都市金沢』をめざして」(2013年3月)、「金沢市国際交流戦略プラン」(2015年3月)、「金沢市観光戦略プラン」(2016年3月)、「世界の交流拠点都市金沢重点戦略計画」(2017年2月)など、観光や国際交流を強く意識して、そのために金沢として何を重視し、何を実践していくかを折に触れて明確にしているその姿勢がよく表れている。

「世界の『交流拠点都市金沢』をめざして」には、世界の交流拠点都市としての機能を高めていくためには、「市民協働によるまちづくりを進めていくことが重要です」とある。してみるとこれは、一見観光政策



およそ観光パンフレットとは思われない「kurun」の表紙

のようで見えて、実はまちづくりのことを謳っているのだということに気づく。この、観光とは結局のところ、自分たちが何者なのかを問い直し、明確にし、発信する一連のプロセスであると規定して、それを実際に実践している金沢の在り方は、大いに参考にすべきであると思う。

その手掛かりとして、他からどう見えているのかを知り、その強みを活かす、強化することは重要である。その意味で、冒頭に紹介したような調査は有用であると思うが、肝心なのはその結果を踏まえた対応である。すなわち、金沢のよう、具体的に何をやるかを平易な言葉で内外に伝えようとするアクションである。金沢の「金沢市観光戦略プラン」には「かがやく」、「ひろげる」、「つどう」、「めぐる」、「もてなす」、「そだてる」、「つなげる」という、分かりやすく書かれた7つの基本戦略とそれに伴う主要施策が明示されている。観光を通して、自分たちの目指す都市像を自分たちで描く努力をすることが、自分たちにとっても重要であることに気づくべきである。

東北をひとつの国となす事

最近あらためて、自分の住む東北という場所について考えさせられた一冊として北方謙三による『破軍の星』を取り上げてみたい。九州出身のハードボイルド作家が書いた、東北を舞台として始まる歴史小説、という点で既に異色だが、描かれる時代が一見、東北とは関わりが薄そうな南北朝時代というのも面白い。

た鎌倉幕府もまた、百五十年の時を経て滅ぶ。所謂戦国時代に入り東北各地の武将が表舞台に立つまでも未だ二三百年代待たねばならず、蓋し鎌倉幕府が滅び、室町幕府が興る、この年代は東北一円にとっては大なる空白期間、混迷と忍従の時代とも未来の私達には感じられるのである。

ところが、その一見「眠れる獅子」の状態である東北を叩き起こし、彗星の飛び去るが如き短期間のうちにとんでもない事をやってのけた人物がいた。それが、北畠顕家である。

奥州藤原氏による百年に渡る云々「蝦夷(現地住民)による東北自治」を攻略し、これに終止符を打った源頼朝。その彼が創始した

顕家は、一言でいえば、稀代の天才児。麒麟児、風雲児とも形容でき、天草四郎時貞にも通じる、民衆を心酔させるものを持つ少年戦士・という風に、イメージされるかも知れない。

南北朝時代、それは武士による国家統治を見直し、再び天皇による政治を目指した果てに、二つの勢力が分裂、それぞれが別の天皇を奉じて争う事になる、という特異な一時代。結局は新たな武士の政府を目指す事になる足利尊氏に對抗し、後醍醐天皇が東北勢の押さえにとわず十六歳の少年公卿・顕家を陸奥守として多賀城に派遣する。およそ



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

現代の感覚では考えられない事であるが、幼い頃からその英邁ぶりを知られた顕家は現地の伊達・南部ら有力武士をまとめ上げ、わずか三年のうちに東北全土の騒乱を鎮定してのけるのである。そればかりか、間髪置かず京で拳兵した足利を倒すべく、東北の兵総勢五万を引き連れて約六百キロもの距離を怒涛の進軍の末、見事足利軍を撃破、尊氏を九州へ敗走させるに至った。そのカリスマもさる事ながら、百五十年前の奥州合戦にて頼朝軍にあっけなく敗れたはずの奥羽の軍団が、秀吉の中国大返しを遥かに超える強行軍に耐えた上、倍以上の規模を誇る「西の軍勢」を沈めたという事実。本来あるべき「東北を守るための戦い」ではなかったのが残念だが、その潜在能力の底知れなさは、現代の東北人も心に秘めておいてよい事かと思う。

これら信じ難い英雄譚の如き出来事は、正史として『太平記』に認められる事であり、その概要自体、創作の入り込む余地がない。つまりこれだけでも充分、史実としては驚異的な程に小説的、エンターテインメント的のすべからぬのだが、その主だつた記録である『太平記』においても、その存在は主役的ではなく、比較的その詳細は知られてこなかったように思われる。膨大な数の人物が登場する長編文学『太平記』の中では、

二十一歳で戦死するというその生涯はあまりに瞬間的過ぎたのだろうか。『破軍の星』は基本的にその史実にはもちろん忠実に、しかし悲劇的なだけでない、現代人の心にも訴えかける男たちの生き様を描ききり、忘れられかけた先人の想いを現代に甦らせたい一つの偉業とも言えよう。

しかし本作には、もう一つ重要な、思いがけぬ「隠し味」が込められている。それは、顕家の奥羽平定には、奥羽全土の山中に情報網を張り巡らす、陰の支配者が一役買っていた・それが「安家(あつか)一族」である。安家は地名や洞窟名として岩手県北部に実在するが、一族のルーツは「嘗て中央から独立した力と組織を持っていた」つまり奥州藤原氏である事を匂わせながら、明らかにはしていない。即ちこれは創作であり、本作唯一にして重要な小説的脚色なのだ。

作品中では、この安家一族の長・利通と、顕家の対談場面が数度あり、長の口から一族代々、奥羽を一つの家とする事を夢見てきたという告白がなされる。安家は、未だ嘗て奥羽の地に出現した事のない顕家という逸材に、新たな時代の東北のリーダーとしての期待をかけるのだ。以下、本文から両者の言葉を抜粋する。「国とは何かを考えたなら、

白河以北が一つの国であっても、不思議はありません。」「(利通)

「民草(人民)という事で考えれば、白河以北は一つの独立した国であつた方がいい」(顕家・心中独白)

「それ(朝廷)が日本の中心である事は構いません。しかし陸奥は、古来よりの日本ではありません。全く別の国でありました。」(利通)

こうした対話の中、「危険すぎる話題だ。」「この話題に興味を示しながら、明らかに警戒もしている。」

といった地の文が繰り返して挿入される。これは勿論、対談に臨む顕家自身が感じている事であろうし、どこか現代を生きる作者自身も警戒しているようにも見える。

この辺り、まるでまさに奥州藤原氏の興亡を描いた『炎立つ』の続編を読むかのようにある(実は『破軍の星』出版の方が二年早いのだが)。その作者・高橋克彦は自身東北人の誇りを賭けて書ききつたというのが、

『破軍の星』の作者・北方謙三は九州の佐賀県出身である。小学生時代に神奈川県に移つたといえ、何故これほど東北の歴史の基層を踏まえた重厚な描き込みができたのか。氏は、『武王の門』『楠木正成』など

歴史小説としては「北方太平記」とジャンル分けされるほどに南北朝時代を取り上げた作品が多く、おそろくのめり込んだ時代の、そこに生きる様々な人物の立場に成りきり、命を削って書くのである。『破軍の星』を書く時、彼はまさに顕家と同じように他地方の人間ながら東北を理解し、東北人となつていったのかも知れない。

ただ、確かに奥州藤原氏の末裔の存在は顕家の活躍に説得力を、そして物語には深みを与えているのだが、私は敢えて「史実には安家の存在は無かつたであろう」と思う事にしている。もちろん、その部分は創作なのだから当然なのだが、読者は創作にも事実の可能性を見出して楽しむもので、それを否定するのは辛いものなのである。しかし、そうでもしないと、史実どおりに顕家が二度目の出兵で戦死し、結果的に安家一族が、そしてその後の奥羽・東北が失つたものが大き過ぎる事になってしまうのだ。

顕家が安家の求めに応じて腐敗した朝廷を捨て、奥羽のリーダーとして立つていたら、どうなっていたか。顕家の元で戦つた武将には伊達氏七代目・行朝もおり、十代後の子孫・政宗による仙台開府と同じくあつたかも知れないが、そもそも、再び奥羽が一つに統治されたならば、東北の地に適合した政策が行われて、その後徳川幕府による分割統治に至るまでの稲作の強要、度重なる飢饉による弱体化も抑えられ、戊辰戦争における分断も敗北もなかったかも知れない。そのような諸々を夢想すれば、顕家が自らの可能性を振り切って二度目の遠征を敢行し、犬死に近い最期を遂げる事がいかに無念な事か、その喪失感はいかに知れないのである。

しかし、ここで疑われねばならぬ事が三つはある。一つ目は、北畠顕家が本当にそれほどの逸材であつたのか、である。まず史実から見て顕家が略略・政略的に優れた、類稀な資質の持ち主であつた事は確かだ。しかし彼が後醍醐帝の失政を諫めた奏上文には「自分の低い者には官位を与えるべきではない」との主張があり、貴族の立場からの差別意識であるとして、その展望の限界を示唆する意見が多い。ただ私には、帝が官爵を乱発した軽率さが世の乱れを招いた事から出された諫奏ではないかとも思われ、これだけでは顕家に露骨な差別意識があつたかどうかは証明できないように思う。天皇への怒りを素直に表明した奏上文からは身分というものを感じない。徹に見据えていた側面も読み取れる。とはいえ、朝廷を最上の存在とする信念があつてこそ、東北人の多大な犠牲を伴う遠征を二度

に渡り決行できたのである。うし、この事からも、東北を一つの国とし自らが治める、などというビジョンは若き公卿の心に育つてはいなかつた、と判断するのが妥当のように思われるのだ。

二つ目は、何故、東北勢が顕家にあれほど心酔し、従つたのか、である。(奥州にも敵勢力は根強かつたが)まず、彼が中央から派遣された存在である事。そして当初から、東北全体を見渡す必要のある立場だつた事、この二点だろう。たとえ逸材であろうと、地元人ではないか、一地域の主に過ぎない伊達や南部の元では、東北人は一丸にはならない。それは現在の、行政が分割された東北でも同様である。中央からの圧倒的な権威に平伏し、靡いていく・東北人の等閑ならざる問題点もまた、ここには浮き彫りになつてくる気がするのだ。

三つ目は、そもそも「稀代のリーダー」の出現を、私たちは待ち続けるだけで良いのか、それしかないのか、という事である。安家

一族は、何代にも渡つて培つた組織力と、伊達や南部にはない東北全体を把握した世界観を持っていた。にも関わらず、彼らは顕家レベルの逸材の出現を待ち続けていた。もし彼らが実在していたなら、そのような途方もない年月を浪費して終わるような、不毛な道を選ぶだろうか?

『破軍の星』を読み、東北人が気づかねばならないのは、「安家一族は既に、必要なものを全て持っていた」という事だ。東北全体を見据える視点と、独立の為の豊かな人材と国土。それに気づかないように山に隠れている。まるで現代の東北人を映す鏡のようだ。

もはや、北畠顕家の出現を待つ必要などない。それは、現代の私たち東北人も、実は同じなのではないか? そう問うてみたい気が、私はしているのである。



「国とは何かを考えたなら、白河以北が一つの国であっても、不思議はありません。」「(利通)

「民草(人民)という事で考えれば、白河以北は一つの独立した国であつた方がいい」(顕家・心中独白)

「それ(朝廷)が日本の中心である事は構いません。しかし陸奥は、古来よりの日本ではありません。全く別の国でありました。」(利通)

こうした対話の中、「危険すぎる話題だ。」「この話題に興味を示しながら、明らかに警戒もしている。」

といった地の文が繰り返して挿入される。これは勿論、対談に臨む顕家自身が感じている事であろうし、どこか現代を生きる作者自身も警戒しているようにも見える。

シリーズ 遠野の自然 「遠野の立秋」 遠野 1000 景より



花と蝶

今年の夏は、振れ幅の大きな天候激変に振り回された。七月から八月にかけての猛暑から、その後は一転全国的に大雨が続き、いつの間にか涼しい夏に変化していった。

八月七日は二十四節季では立秋ではあるが、あまりにも早すぎる変化である。遠野も例外ではない。つい先ごろまで三十度越えが続いたが、一転して最高でも二十度前半、最低は十度台の秋模様となっている。



ギンリョウソウ

今回号の写真はテーマがさまざまにぎやかである。ユリに留まった蝶の羽の色が鮮やかであり、ヒカリゴケも妖しく光っている。ギンリョウソウやオオバギボウシの形状が面白い。夏祭りなのか、神楽衆の

子供たちが愛らしい。コガネムシのつがいのシヨットもかわいらしい。SL銀河と煙の色とひまわりの黄色が好対照だ。蛇滝の曲がりくねった流れが涼しさを伝えている。



ヒカリゴケ



SL 銀河 平倉 足ヶ瀬間



神楽衆



蛇滝



小金が増えそう



オオバギボウ



遠野祭り—鹿踊り

東北の夏・秋祭り情報

ねぶた / 七夕 / 竿灯だけではない
見ごたえある祭りが盛りだくさん
それらのほんの一部だけご紹介

これから間に合う秋祭り
来年夏に予定する夏祭り



遠野祭り—南部踊り

遠野祭り 9月16/17日(2017)

遠野市の郷土芸能(神楽、太神楽、田植え踊り、南部ばやし、しし踊り、さんさ踊り等)が各地区から集まり、見ごたえ抜群

【アクセス】東北新幹線花巻駅→釜石線・遠野駅

【時間】9/16(土) 10:30 21:00

9/17(日) 12:00 16:30

【会場】9/16(土) 遠野市街地 / 9/17(日) 遠野郷八幡宮 *詳細は遠野市HP参照

東北の祭りといえば、青森ねぶた、秋田竿灯、仙台七夕が有名です。あるいは、この三大祭りに、岩手のさんさ踊りと山形の花笠まつり、福島のわらじ祭りを加えた六大祭りがすべてと思われているかもしれませんが、しかし、東北の祭りはそれだけではありません。他にも多くの祭りがあります。この記事ではそのほんの一部だけをお伝えします。

青森ねぶたの影に隠れた感のある弘前ねぶたは、筆者の好きな夏祭りです。青森ねぶたのような巨大な山車はありませんが、より地域に密着したアットホームな祭りです。

相馬野馬追は勇壮な祭りです。祭りというより、神事的要素が強く、また、戦国時代の騎馬武者姿が凛々しい祭りです。

石巻川開き祭りは花火が有名ですが、もともとは、供養祭や川施餓鬼供養祭などの祭典行事からスタートした祭りであり、東北大地震後の再開にあたっては、まさに犠牲者供養の祭りとなりました。

北上みちのく芸能まつりは、近隣の郷土芸能百団体以上が一堂に会する見ごたえのある祭りです。

これらは、残念ながら、この新聞発行時には終了しておりますが、遠野祭りは九月中旬開催です。遠野市民の大半が参加する町ぐるみの祭りであり、一度は見とくべき祭りです。

相馬野馬追 7月29/30/31日(2017)

主な神事としては、雲雀ヶ原祭場地において行われる「甲冑競馬」と「神旗争奪戦」、街を騎馬武者が行進する「お行列」、馬を追って素手で捕らえる「野馬懸」からなります。

【アクセス】 JR 福島駅→相馬方面行きバス 90分
【時間】 早朝からの催しもあるがほぼ 9:30AM から
【会場】 福島県南相馬市原ノ町各所、その周辺

弘前ねぶた 8月1～7日(2017)

三国志や水滸伝などの武者絵を題材とした大小約80台の勇壮華麗なねぶたが、城下町弘前を練り歩く夏まつり。青森ねぶたとは一味違う地域に密着したアットホームな祭り。

【アクセス】 東北新幹線新青森駅→奥羽本線・弘前駅
【時間】 8/1～6は7:00PM～、
8/7は10:00AM～
【会場】 青森県弘前市内

北上みちのく芸能まつり 8/4・5・6日(2017)

日本の民俗芸能を代表する「鬼剣舞」「鹿踊」をはじめ「神楽」「田植踊」など100余団体が一堂に会し、街のあちらこちらで芸能を見ることができます。

【アクセス】 東北新幹線北上駅
【時間】 8/4: 18:00 20:30、
8/5: 11:00 20:30
8/6: 10:00 20:45
【会場】 北上駅前など

石巻川開き祭り 7/31/8/1(2017)

花火等のイベントを前に、供養祭や川施餓鬼供養祭などの祭典行事が厳粛にとり行われ、川の恵みに感謝するとともに、ご先祖様の供養のために始まったお祭りです。

【アクセス】 JR 仙台駅→仙石線・石巻駅
【時間】 7/31の供養花火は7:45PM開始
【会場】 供養花火は北上川河口「中瀬」